

大東文化歴史資料館だより

第14号 2013. 5. 31

大東文化学院時代の中国旅行記（一）

歴史資料館運営委員・中国学科准教授 吉田 篤志

私の手許に、大東文化学院時代の中国への修学旅行の記録が二冊存する。一冊は表紙に「大東文化学院第壹回支那大陸旅行記」（以下、第一回旅行記と言う）と題し、背表紙は未記入で、孔版袋綴182頁（目次を除く）で、奥付が無く発行年が定かではない。もう一冊は表紙・背表紙に「燕呉遊蹤第二回支那大陸旅行記」（以下、第二回旅行記と言う）と題し、表紙・背表紙・奥付に発行元を「大東文化学院」とし、活字印刷400頁ほどで、奥付に編輯兼発行者を川又武とし、発行年は昭和6年（1931）7月5日とある。口絵に大津淳一郎総長の題字・細田謙蔵団長の題字・曲阜衍聖公府と天津離宮における集合写真・燕呉紀游略図等を載せ、次いで大津総長と細田団長の序文が載る。川又氏の「編輯後記」の日付は昭和6年6月で、「昨夏暑中休暇を利用して支那の南北を駆け巡った。……」とあるから、第二回旅行は昭和5年（1930）の夏に実施したことが分かる。

第一回旅行の実施年を記すものは、第二回旅行記に載る渡部實一の「曲阜（附録：第一回旅行記より曲阜泰山の記事を抄録）」の「後記」に「昭和四年第一回大陸旅行を舉行し、史蹟を探るや其の主眼を孔廟に置く。……」とあり、また第二回旅行記に載る小林清八郎の「泰山と廬山」の後に山田生なる者の「泰山について」と題する旅行案内を附録として載せ、その後書に「昨夏七月、將に禹域に遊ばんとして、登岱の効を全うすべく應急の調査をしたのが、此の篇であった。……」とあり、昭和4年（1929）の夏に実施したことが分かる。また第一回旅行記の最後に載る旅行団長峰間信吉教授の「感謝の辭」に「本年は我外務省文化事業の高誼に浴し、多額の旅費を補給せられて、此の本学院第一回支那大陸旅行團の派遣を見る事になったのである。……」とあり、旅行は外務省の補助金により実施したことが分かる。

第二回旅行記の前編凡例に「第二回旅行にありては、戦亂の故を以て山左の聖蹟を巡禮すること能はざりしを以て、特に後篇曲阜に附するに第一回旅行記を以てせり」（第二回旅行記に掲載の「曲阜」や「附録」の曲阜泰山の記事の抄録、また執筆者の「渡部實一」の名は、第一回旅行記には無く、第一回旅行のメンバーにも渡部の名は無い）とあり、また後編凡例に「第一編凡例に於て述べたる理由により、廬山と泰山の篇を缺きたるを以て、特に第一回旅行に於て發表せられたる小林君の論文を掲げて、その缺を補はんとす」（第二回旅行記に掲載の「泰山と廬山」、また執筆者の「小林清八



郎」の名は、第一回旅行記には「角田清八郎」の「鴻爪録」として掲載する。また附録の山田生執筆の旅行案内「泰山について」は、第一回旅行記には見当たらないとあることから察すれば、当時の済南・曲阜方面、或いは長江流域の九江（廬山）・武漢方面は「戦亂」による危険地域であったことが分かる。この「戦亂」とは昭和2年（1927）に起きた漢口事件や翌3年（1928）に起きた済南事件等のことで、漢口事件は湖北省漢口の日本租界の日本人に対する中国人の略奪暴行事件であり、済南事件は山東省済南で北伐中の国民革命軍（蒋介石）と済南に出兵した日本軍との間に起きた武力衝突事件である。

これらの事件の本を正せば、明治初期からの日本の掲げたスローガン「脱亜入欧」や「富国強兵」による中国大陆への進出や、明治28年（1895）日清戦争の勝利による日本・日本人の優位性と中国・中国人に対する蔑視感に起因し、更には大正4年（1915）にドイツが有していた山東省の権益を日本に譲り渡すことなどを記した「対華21ヶ条要求」やその後の中国軍閥と日本との癒着に対し、中国の学生を中心に反日運動が起こり、大正8年（1919）5月4日に起きた五四運動へと発展していく。漢口事件や済南事件もこの反日運動が原因しているものと推測できる。その証拠に、第二回旅行記の「旅行日記」（執筆者：川又武・濱中清）の8月8日条下に、青島上陸に際し、埠頭の正面の建物に「廢除一切不平等條約」「打倒一切國際帝國主義」「實現三民主義」「實成國民革命」「中國國民黨青島特別市黨務委員指導宣傳部」等と、国民党のスローガンを大書していたことを記す。この事件の後にも昭和6年（1931）の満州事変や昭和7年（1932）の第一次上海事変等が立て続けに起き、日本と中国との険悪な状態がエスカレートしていく。

第一回旅行は漢口事件・済南事件直後の昭和4年（1929）に実施しているので、事件後の緊迫した状況が依然残っていたであろう。そのことは第一回旅行記の「旅行日誌」8月4日条下、漢口を船で出発する際に「出発前警備艦矢矧より兵士来りて、船内使用人の點檢、乗客数の調査、警備の手配等をなす。漢口より上流の航路は漸く危険地帯に入るを以てなりと云ふ。……」とあることから察せられる。また「旅行日誌」8月21日条下、天津駅に到着の際に「驛前の駐津日本憲兵分隊派遣所に憩ふ」とあり、北京に到着の際も「腕車日本駐屯軍兵舎に至る」とあり、「旅行日誌」を見る限り、行く先々で日本の軍隊や警察に守られ、日本総領事・日本商務官・警察署長等の注意や談話を聞き、現地の状況や国民党・共産党・軍閥・匪賊等の情報を把握しながらの旅行であったことが分かる。第二回旅行も同様に緊迫した状況における旅行であったことは、「旅行日記」（執筆者：川又武・濱中清）から窺うことができ、北平（北京）における8月27日条下に「時方さに南北軍交戦中なりしかば、南軍の飛機二臺、北平の上空に來り、北海公園附近、及び汪精衛兆銘の邸宅附近に、爆彈十數個を投下せり。北軍は之を撃退せんとして、盛んに砲火を交へたり。……」とあるがごときである。

＜資料寄贈ご協力をお願い＞

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、学園に関わる資料を広く収集しています。教科書・講義ノートのほか、写真・映像、機関紙・新聞など、ご提供いただけるものや情報がありましたら、お気軽にご連絡ください。ご協力を宜しくお願いいたします。